

令和2年度修了生 修士論文概要

論文題目：就労を果たしたひきこもり経験者の語りからみる就労継続をめぐる課題

氏名：稲永 龍一

概要

近年の実態調査（内閣府，2016，2018）により，推定で約115万人のひきこもり当事者が存在することが明らかになった。ひきこもり問題に対する社会の関心は高く，ひきこもり当事者の長期化・高齢化による8050問題などは社会問題として認識されている。そうした流れの中で様々な批判や概念の混乱を経ながらも，ひきこもり当事者の就労は依然として，ひきこもり支援の目標のひとつとして考えられている。

本研究では，そうしたひきこもり当事者の就労に関して，より良い支援を行うための手ごかりを得るべく，就労を果たしたひきこもり経験者へインタビューを実施し，修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて探索的研究を行った。

その結果，ひきこもり経験者が就労へ至り，就労を継続していくプロセスに関する理論が生成された。また，本研究では生成された理論に基づき有効であると考えられる支援方法も示唆された。今後，本研究で得られた理論を実践の場に導入することで，理論の方法論的な限界を拡充していくことが求められる。

論文題目：LINE相談への援助要請意図に関連する個人要因の検討

氏名：井上 あすか

概要

LINE相談とは、SNSアプリケーションの1つであるLINEを使用して行われる心理相談である。利点として、特に若い世代には電話やメールよりもアクセスが簡単で相談しやすいこと、心理的な匿名性が高く自己開示しやすいこと、カウンセラー側から積極的に情報を発信できることなどを指摘できる。しかし一方で、動機づけの低い相談や作話・冷やかしが増える可能性、クライアントの言語能力が低い場合は相談が深まりにくいなどの欠点も挙げられている（杉原・宮田，2018）。本研究では、LINE相談への援助要請意図に関連する個人要因について、対人不安、自己隠蔽、ソーシャルスキルの側面から実証的に検討を行うことを目的とした。さらに、自由記述の質的分析結果を踏まえながらLINE相談を求める層の背景要因についての検討を行った。統計分析の結果からは有意な結果は得られず、LINE相談への援助要請意図に関連するのは対人不安、自己隠蔽、ソーシャルスキルではない可能性が示された。さらに質的分析の結果から、「状況に対する不安の感じやすさ」、「相談行動にかかる身体的または精神的負担」、「身近な人への援助要請」、「対面状況における自己開示への不安」、「言語能力」の6つの要因がLINE相談への援助要請意図に

関連している可能性が示された。LINE相談への援助要請意図に関連する要因について検討を行うことは、クライアントのニーズの理解及び対応の明確化を助け、今後のLINE相談の発展に役立つと考えられる。

論文題目：女子学生のASD傾向とソーシャルサポートがレジリエンスに与える影響

氏名：岩佐 実旺

概要

ASD傾向を構成する5つの特性が、どのようなソーシャルサポートに影響を及ぼすかを検討するとともに、これを介してレジリエンスの高さにどのような影響を及ぼすかについて検討することを目的に、150人の女子大学生を対象とした質問紙調査を実施した。

使用した尺度は、自閉症スペクトラム指数日本語版、大学生用ソーシャルサポート尺度、精神的回復力尺度であった。これらの尺度間の相関分析および重回帰分析の結果から、ASD傾向が家族と友人のソーシャルサポートに及ぼす影響を検討するとともに、ASD傾向がソーシャルサポートを媒介としてレジリエンスに影響を及ぼすモデルを探索的に作成した。最終的なモデルは十分な適合度を有しており、以下のような関連が示唆された。

ASD特性のうち「社会的スキル」は友人の評価的サポートを介して肯定的な未来志向に、友人の情緒・所属的サポートを介してレジリエンスに負の影響を与えていた。「想像力」は友人の情緒・所属的サポートを介して感情調整に負の影響を与えていた。その一方で、「注意の切り替え」は家族の評価的サポートを介して感情調整に負の影響を与えていた。

またソーシャルサポートを介さず、直接的にレジリエンスに影響を与えるASD特性も認められた。「社会的スキル」は新奇性追求と感情調整に、「注意の切り替え」は新奇性追求と感情調整と肯定的な未来志向に、それぞれ負の影響を与えていた。一方で「細部への注意」は肯定的な未来志向に正の影響を与えていた。

これらの結果から、ASD傾向を有する大学生において、周囲からのソーシャルサポートが得られやすくなるように、それぞれが有するASD特性に合わせた支援を行うことにより、レジリエンスを高める一助となる可能性が示唆された。特に、「社会的スキル」に関わる障害に配慮した支援を行うことは、有用だと考えられた。

論文題目：女性の生きがい獲得プロセスの検討

—世代間比較と震災経験に焦点をあてて—

氏名：駒田 里奈

概要

東日本大震災発災当時、東北地方に住んでいた20代から50代の女性7名を対象者とし、

女性の生きがいについておよび生きがい獲得プロセスについての検討を行った。加えて、震災経験が生きがいを与える影響について検討した。

調査方法はインタビューであり、調査時期は2020年7月下旬から8月上旬であった。分析方法は計量テキスト分析：KH-Corder（樋口，2014）を採用した。

その結果、生きがいとはどのようなものか具体的に話すことができている対象者は、生きがいがあるか否かという質問に対して、「ある」あるいは「ない」と明言した対象者であった。「ない」と明言した対象者からも生きがいとは何か具体的に語られていた。そして、生きがいが「ない」と答えた2名が最も多く生きがいとは何かについて語っていた。その2名は、いずれも50代後半であった。加えて、20代後半と30代前半の2名の生きがいには「生きる活力・頑張る力」といった要素や「癒し・安らぎ」といった要素が共通して含まれていることが示唆された。

さらに、生きがいという1つの概念/言葉には「生きがい感」、「生きている実感」といった感覚や「生きる目的」、「生きる意味」というような生きるうえで支えとなるものといった意味合いがあることが示唆された。加えて、震災経験が生きがいに影響を与えたということは、本対象者においては確認されなかった。

論文題目：女子大学生の過剰適応と自己及び他者へのスキーマが抑うつに与える影響

氏名：鈴木 愛美

概要

本研究の目的は、女子大学生の過剰適応と自己及び他者へのスキーマが抑うつに与える影響を明らかにすることであった。本研究はWebアンケートを用いて実施され、A女子大学および研究者がネット配信の可能な女子の大学生115名を対象とし、分析を行った。Webアンケートでは、①フェイスシート、②青年期前期用過剰適応尺度、③日本版Brief Core Schema Scale（以下、JBCSS）、④Center for Epidemiologic Studies Depression Scale日本語版（以下、CES-D）を用いた。

階層的重回帰分析の結果から、過剰適応には、JBCSSの下位尺度の「自己ネガティブ」のみが有意な正の影響を及ぼしていた。また、CES-DにはJBCSSの下位尺度の「自己ネガティブ」と過剰適応が正の影響を与えていた。

さらにJBCSSの4つの下位尺度を用いて、階層的クラスタ分析（Ward法）を行い、“スキーマ不確定群”、“自他ネガティブ群”、“自他ポジティブ群”の3つのスキーマクラスターを得た。そして、スキーマパターンによって、過剰適応とCES-Dの得点が異なるかどうかを明らかにするために一要因の分散分析を行った。その結果、青年期前期用過剰適応尺度の総合点と青年期前期用過剰適応尺度の下位尺度の「自己抑制」、「自己不全感」、そしてCES-Dにおいて有意な群間差が見られた。Tukey HSD法による多重比較を実施したところ、青年期前期用過剰適応尺度の総合点において、自他ネガティブ群が他のクラス

ターと比較し有意に高い得点を示していた。また、青年期前期用過剰適応尺度の下位尺度の「自己抑制」において自他ネガティブ群が他のクラスターと比較し有意に高い得点を示していた。「自己不全感」においては、自他ネガティブ群>スキーマ不確定群>自他ポジティブ群の順に有意に高い得点を示していた。CES-Dにおいては、自他ネガティブ群が他のクラスターと比較し有意に高い得点を示していた。

本研究の結果から、自己に対するネガティブなスキーマが過剰適応に影響を与え、過剰適応が抑うつを高めることが明らかとなった。また、本研究においても先行研究同様に自己に対するネガティブなスキーマは単体でも抑うつを高めることが示された。また、自他ともにネガティブなスキーマを持つ者は過剰適応を強め、抑うつも高めることが明らかとなった。さらに、自己および他者に対するスキーマが確定していない者はアイデンティティの確立に不利な影響を与える可能性が示唆された。

論文題目：大学生におけるふれ合い恐怖的心性と自己愛・信頼感・自己隠蔽の関連
－女子学生を中心に－

氏名：松本 真依

概要

ふれ合い恐怖とは、情緒が深まる場面での対人関係で困難をきたす青年期心性である(山田ら, 1987)。本研究では、ふれ合い恐怖的心性の背景に潜む困難について、自己愛、信頼感、自己隠蔽の側面から実証的に検討を行うことを目的とした。さらに、その結果を踏まえながら、ふれ合い恐怖と社交不安症、回避性パーソナリティ障害の異同について検討を行った。

結果より、ふれ合い恐怖的心性は評価過敏性自己愛、自己隠蔽、他人への信頼の弱さを背景に持つと示された。よって、ふれ合い恐怖的心性を持つ青年は、自己愛を満たすために対人交流上の困難を感じながらも人付き合いを試みるが、傷つきやすさや自己隠蔽の傾向を持つため、「知り合って時が経つほど不安になり疎遠になる」と考えられる。以上より、ふれ合い恐怖的心性は、広く浅い人間関係を好む現代青年と共通する部分があるといえる。かつてはふれ合い恐怖という言葉で表される青年は特異的な存在であったが、時代の移り変わりに伴って一般的な存在になりつつあると示唆された。

さらに、ふれ合い恐怖は回避性パーソナリティ特性を背景にもつ人が、人と親密になる場面に特化して恐怖症を呈した時に見られる心性であると示唆された。ふれ合い恐怖概念の明確化がなされないと、ふれ合い恐怖の青年が類似した症状を呈する社交不安症や回避性パーソナリティ障害の軽症例として扱われ、適切な介入が行われないうまま見過ごされる危険性がある。よって、ふれ合い恐怖の概念を明らかにする必要がある。

論文題目：遠隔カウンセリングにおける効果の検討

—メールカウンセリングにおける繰り返し技法に焦点を当てて—

氏 名：三村 遥

概 要

本研究では、メールカウンセリングにおける繰り返し技法の効果を量的及び質的に明らかにすることを目的とした。対象者は私立X女子大学学部生102名であった。質問紙は、①心理専門職への援助要請に対する態度尺度、②ポジティブ感情尺度（pre）、③刺激文、④ポジティブ感情尺度（post）、⑤自由記述（感想文）に回答を求めた。対象者を4群に分け、Google formのURLを配付し回答を得た。刺激文（就職活動主訴・対人関係主訴）は、①就職活動主訴の繰り返し技法なし、②就職活動主訴の繰り返し技法あり、③対人関係主訴の繰り返し技法なし、④対人関係主訴の繰り返し技法ありとした。これは、学生相談室のカウンセラーが送信したという設定になっている。この研究から、以下のことが明らかとなった。

1. 研究Ⅰ

3要因の分散分析（混合計画）を行った結果、メールカウンセリングにおいては、繰り返し技法を使用しない方がポジティブ感情下位尺度の快適さや共感、素朴な安らぎを感じることが明らかとなった。

2. 研究Ⅱ

刺激文を読んで、どう感じたのかを自由記述（感想文）として回答を得た。これを計量テキスト分析（KH Coder）を用いて検討を行った。その結果、主訴に関係なく、メールカウンセリングにおいて繰り返し技法を多用されると、相談者側がネガティブな感情を抱く可能性が高いことが示唆された。

以上のことから、メールカウンセリングにおいて、カウンセラーは繰り返し技法を多用しないことに留意することが重要である。

論文題目：子どもの遊び能力と学校適応感の関連

—遊び体験の視点から—

氏 名：森 若葉

概 要

本研究では、遊び能力と学校適応感の関連性を検討した。また、調査時期は、新型コロナウイルス感染症による史上初の緊急事態宣言の発令により、学校が休校した時期であったため、新型コロナウイルス感染症により今までの遊びがどのような変化があるのかを先行研究と比較し、検討した。

本研究では、性別・学年別を独立変数、基本的遊び能力尺度・学校適応感尺度を従属変数とした、二要因の分散分析、基本的遊び能力尺度の下位3尺度得点を高群・低群に分け

たものを独立変数，学校適応感尺度得点を従属変数とした三要因の分散分析を実施した。また，基本的遊び能力尺度を説明変数とし，学校適応感尺度を目的変数とする重回帰分析を行った。その結果，遊び能力が高いと学校適応感も高いことが示され，子どもの学校適応感を向上させる一つの方法として，遊び能力の向上が明らかとなった。また，新型コロナウイルス感染症は子どもたちの遊びに大きな影響をもたらしていることがわかった。解釈には注意が必要であるが，緊急事態宣言発令により，一人遊びが多くなり，友人と遊ぶ児童が減少したことが明らかとなった。また，外遊びよりも内遊びをしている児童が多かった。一方で，休校中に外で遊んでいた児童の約4割が基本的遊び能力の尺度得点が高群であったため，外で遊ぶことと遊び能力の高さの関連がうかがわれ，外遊びの重要性も考えられた。しかし，心身健康に負の影響を及ぼしていることから，現代の日本の対人関係のあり方が反映され，過剰適応の側面も考えられたため，今後介入していく際には，子どもたちの心身健康を配慮する必要があると考えられる。

論文題目：初心者心理臨床家のためのエンカウンター・グループにおける体験の意味の探索的検討

—自己変容の視点から—

氏名：山郷 志乃美

概要

本研究では，エンカウンター・グループにおける体験の意味を自己変容の視点から探索的に検討するため，初心者心理臨床家を対象に継続型のエンカウンター・グループを実施し，セッション後の面接で語られたことを基に現象学的アプローチ（解釈学的現象学）を用いて分析・考察した。その結果，以下のような各々の独自の体験の意味が明らかとなった。(1)「自分の気持ちや考えを言うか・言わないかの判断が全て自分に任されていた」場で，普段意識されない自身の行動の選択プロセスとその選択に伴う葛藤が意識化された体験。(2)自分自身の気持ちや考えを見つめることが出来る時間の中で，「しなきゃ」いけないことに流されて自分の心を蔑ろにしているような“普段の自己”の在り方から，自分の心を大切にするという“新しい自己”の在り方への変化が志向された体験。(3)普段とは違って「強制される」ことがない「自由が許されている」場で，他者とともにながらも自分自身に向き合うことができ，子どもころのような「ありのまま」の自分を体感した体験。そして，このような各々独自の体験に見られる共通点として，エンカウンター・グループという非日常の場で，日常生活における自己とは異なる自己の体験をしたことが浮彫となった。この新しい自己の体験は自己変容の可能性の体験ともいえ，この体験を通して新しい自己の実現が志向され，延いては自己変容が導かれる可能性が示唆された。

論文題目：小学校の担任教師による褒め・叱りに関する研究
—教師の職場環境と児童の学級適応感との関連—

氏名：余川 茉祐

概要

本研究では、小学校の担任教師が行う児童への褒め・叱りのあり方や、これらに影響する要因を明らかにすると共に、担任教師の褒め・叱りが児童の学級適応感に及ぼす影響について検討することを目的とした。

研究1では、小学校の担任教師21名を対象に、教師が日々行っている児童への褒め・叱りや、その実践に影響を及ぼす要因についてインタビュー調査を行い、M-GTA（修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ）による分析を行った。また、この結果をもとに褒め・叱り尺度（担任教師用および児童用）の項目を作成した。

研究2では、小学4～6年生の担任教師68名を対象に質問紙調査を実施した。褒め・叱り尺度（担任教師用）の因子構造を確認した後、職場雰囲気、教師間連携、校務ストレスサー、ストレス反応が直接的・間接的に担任教師の褒め・叱りに与える影響について検討した。

研究3では、児童703名と担任教師18名を対象に質問紙調査を実施した（学級の担任教師との対応データが得られた児童数は598名であった）。褒め・叱り尺度（児童用）の因子構造を確認した後、児童が認知した担任教師の褒め・叱りが学級風土および学校生活を介して学級適応感に与える影響を検討した。さらに、担任教師の褒め・叱りのタイプに基づいて、児童の学級風土、学校生活、学級適応感の差異を検討した。

研究1から、目的、方法、児童の反応および児童理解といった担任教師による褒め・叱りの実践における循環的プロセスと共に、これらに影響する諸要因が見いだされた。研究2から、教師間連携は直接的に褒め・叱りに肯定的な影響を及ぼし、校務ストレスサーや職場雰囲気はストレス反応を介して間接的に褒め・叱りに影響を与えていることが示された。研究3から、児童が認知した担任教師の褒め・叱りは、直接的、または学級風土や学校生活を媒介として間接的に学級適応感に影響を与えていた。また、児童に寄り添った褒め・叱りを重視する担任教師の学級に在籍する児童は、相対的に学習への志向性が高いことが示唆された。